日本ハーディ協会ニュース

NEWS from THE THOMAS HARDY SOCIETY OF JAPAN

第 93 号 (2023 年 4 月 1 日号)

発行者 〒577-8502 東大阪市小若江 3-4-1 近畿大学経営学部高橋路子研究室内
日本ハーディ協会　jimu.thsjapan@gmail.com
編集者　金谷益道 〒 602-8580 京都市上京区今出川通烏丸東入　同志社大学

Weymouth の様子（2022 年 7 月編集者撮影）

縁──深澤さんのこと

藤田 繁

深澤俊さんのことを追憶すると、多生の縁を感じざるをえない。私たちがハーディ学界に出たのは、1966 年 11 月 13 日に京都大学で開催された、日本ハーディ協会第九回大会であった。もちろん深澤さんも私もハーディの論文はすでに幾篇か他の機関で発表はしていたが、日本ハーディ協会で

研究発表したのはこの時が初めてではなかったかと思う。論題も偶然にきわめて似ていた。深澤さんの題は、「ハーディに於ける人間の尊厳の問題―主としてマイケル・ヘンチャードの場合―」であり、私のは「トマス・ハーディに於けるふるさとの問題―人間関係の場合―」であった。そしてこの二編は、『ハーディ―20 世紀英米文学案内―』(研究社, 1969) の「評価」で大沢衛先生が言及して下さった。

深澤さんと個人的にお話したのはその翌年ではなかっただろうか。夏休みに入っていて私は大阪にいた。そこへ大沢先生から電話がかかってきた。今から来ませんかとおっしゃって、行ったのが夢二で有名な湯涌温泉の白雲楼であった。今は取り払われて存在しないが、昭和天皇、皇太子であった平成天皇、それにヘレン・ケラーも滞在した県下随一のホテルである。大沢先生は名にし負う著名人で、昭和天皇が行在された三階におられた。皇太子は二階に泊られ、三階は普段は使われない高貴な部屋なのである。東大ハーディ三羽鳥の後藤義之進先生、飯島隆先生、他にハーディ学会の重鎮が、一段高い畳の上に寛いでおられた。そこに深澤さんも来たのである。私と同じく電話で呼び寄せられたという。若手は私たち二人だけであった。ハーディ・ディクショナリーの方針やこれからのハーディ学会をどうするか、といったことで集まっておられたのである。何時間か語り合って、それを印刷に付するということであった。ただし後に大沢先生が謝っておっしゃったのは、録音に失敗してあの談話は没になったということであった。深澤さんは、なぜ呼び出したんだろうと言った。私はというと、学会の殿上人の威光に圧倒されて、ただただ小さくなっていた。

私たちが次に親しく接したのは、1968 年に開かれた Thomas Hardy Festival に於いてであった。ハーディの没後 40 年を記念して、ハロルド・マクミラン前首相が総裁を務められて、ロンドンのウェストミンスター・アビーで催された 7 月 4 日の式典を皮切りに、ドーチェスターを中心にして 7 月 7 日から 20 日に渡って展開された大イヴェントであった。この祭典に日本から 20 名が参加した。深澤さんも私も大沢先生のお誘いで参加したのである。行事の詳細は 1968 年刊の 『日本ハーディ協会会報』 No. 7 に任せるが、深澤さんの学者としての誠実なお姿に接した。何よりもその実力を示されたのは、この旅行で撮られた写真を鏤めたハーディ像を直後に上梓されたことである。そのタイトルも『トマス・ハーディ＋深沢 俊』 (れんが書房, 1971)で、深澤さんにはハーディとご自分の像の輪郭が明瞭に見えていたように思う。今も大して変わらないが、当時の私にはハーディも自分も茫漠として見えていなかった。私に映ったのは、ずっと前を進んでおられた深澤さんの後ろ姿であった。

次に深澤さんと親しく共に過したのは、1984 年 7 月 28 日から 8 月 3 日まで Weymouth College で催されたハーディ・サマー・スクールであった。一週間足らずのこのセミナーで、 オーガナイザーのワイトマン夫妻やピニオン夫妻やハロルド・オレルさん、あるいはデズモンド・ホーキンズさんらと歓談することもあったが、何よりも親密に過したのは、深澤さんと黒野豊さんと私の三人の夜毎のビール・パーティだった。セミナーの後深澤さんはジョージ・エリオット・カントリーに行かれたが、その折に海老根宏先生に紹介してくれた。海老根さんも黒野さんも今に至るまで親しくしてくださっているのはありがたいことである。

あの頃私たちは若かった。深澤さんは私を新居に招いて泊めて下さり、奥様の和子さまと共に手厚くもてなして下さった。深澤さんは当時の学者には珍しく車も免許もお持ちで、駅まで迎えにこられた。川沿いを通ってお家に近づくと、二階建に柱が何本か突き出ていた。まだ継ぎ足すんだとおっしゃった。深澤さんの真面目で堅実な精神が具現しているようであった。お言葉通り、あの二階建は三階建になっている。私にはその後の深澤さんと日本ハーディ協会との関係を象徴している

ように思われる。日本ハーディ協会は大沢衛先生によって創設され、揺るぎない礎を築かれた。そのうち 10 年ほど私も先生の手足となった。先生が他界された後、皆川三郎先生、吉川道夫先生が会長を襲名され、比喩的にいえば、しっかりした二階建にされた。その後を継いだ深澤さんは堂々とした三階建にされたのである。 組織の近代化、外国学者との交流、機関誌の充実等、深澤さんが果された役割は甚大であった。深澤さん、半世紀を越えて親しくして下さって、ありがとう。いま日本ハーディ協会は、金子幸男新会長のもとに、更に大きく成長発展しようとしている。あなたの優しく大らかな目で見守って下さい。縁は切れることはありません。

ハーディと想像力トレーニング

工藤 紅

自分のタイムマネジメント能力の未熟さが原因ではあるのだが、読んでいて楽しいはずの小説を、最近は楽しむ余裕がなくなってきているように感じている。しかし、小説を読む楽しさを忘れているわけではなく、文学の授業では、その楽しさを伝えることを最も大切にしている。今は、文学部に入学したとしても、「そもそも小説というものを読んだことがない」という学生は珍しくない。そこで、学生の文学への興味を少しでも高めてもらうために、どのようなことを意識的に伝えているのかを紹介したい。

コロナ禍を経て、エンターテインメントは大きく変化し、私たちが子供の時に夢中になりすぎて怒られていたテレビは、今は「オワコン」と言われている。今の学生はパソコンやスマホ上で、TikTok などの SNS で次々に流れてくる極々短い映像をながめたり、サブスクリプションサービスでドラマや映画を倍速視聴したりしている。大学のオンデマンド授業の映像も、学生はスピードを速めて見ているようだ。「時短」や「タイパ」を良しとする時代だからかもしれないが、映画のようなエンターテインメント性の高いコンテンツも、長い時間は視聴できなくなっている学生が増えてきているのである。このような学生に、小説には欠かせない長い描写を映像として「想像」させる――つまり、映像を心に浮かべさせる――のはやさしい仕事ではない。そこで想像力を身につけるためのトレーニング材料として使えるのが、ハーディの小説である。出版当初から高く評価されている美しい田園の風景描写だけでなく、自然や建物の描写は非常に緻密で、読者の想像を助ける。視点の移り変わりは、まるでカメラワークのようであり、読者にその場面を想像させるテクニックに溢れている。そして、目に見えるものが詳細に描写されているだけでなく、登場人物の心情も、彼らの細かな動作に表現されている。その動作が正確に想像できれば、彼らのちょっとした心の動きを感じとることも可能なのである。

書かれていることを映像として頭の中に思い浮かべることができると、臨場感とスリルも味わうことができるようになってくる。ここで、*The Mayor of Casterbrige* の第 28 章を見てみたい。章の前半での Stubberd 巡査が老婆の「風紀に関わる軽微な罪」を裁判で説明する場面である。

> Stubberd was sworn, the magistrate's clerk dipped *his pen*, . . . and the constable began . . . .
> "Don't go on so fast, Stubberd," said the clerk.

The constable waited, with his eyes on *the clerk's pen* . . . . He paused watching the point of *the clerk's pen* again. . . .

"Spot measuring *twelve feet nine inches or thereabouts*, from where I –" Still careful not to outrun *the clerk's penmanship* Stubberd pulled up again . . . .

"I object to that!" spoke up the old woman. "'Spot measuring *twelve feet nine or thereabouts* from where I,' is not sound testimony."

The magistrates consulted, and the second one said that the bench was of opinion that *twelve feet nine inches* from a man on his oath was admissible. . . .

"Now then, have you any questions to ask him or anything else to say?"

"Yes," she replied with a twinkle in her eye; and the clerk dipped *his pen*.

"Twenty years ago or thereabout I was selling furmity in a tent at Weydon Fair –"

"'Twenty years ago.' – well, that's beginning at the beginning – suppose you go back to the Creation?" said the clerk, not without satire.　　（イタリック体は筆者）

書記のペンの動きが何度もクローズアップされ、同じ言葉が繰り返され、読者は間違いなく焦らされている。状況を想像することに慣れていない学生にとっても、映像を思い描けるほど詳しい描写が続く。ここで期待できる効果は、臨場感である。読んでいる学生は、裁判の傍聴人となる。その描写があまりに詳細なので、老婆の些細な罪に関する裁判をあえてコミカルに引き延ばしているように感じる学生もいるかもしれない。

それが変化するのは、老婆が「20 年前」と口にした時である。傍聴人として、焦らされていることを楽しみながら次の展開を待っていた読者の前に、Henchard 以外の登場人物たちの知らない「あの」老婆が現れる。のんびりと裁判を見守っていた学生たちもハッとする。フルメンティ売りだった Mrs. Goodenough が、Henchard の過去の「妻売り」をこれから暴露するということを、瞬時に察するのである。「20 年前」の話を始めた老婆を書記が馬鹿にして茶化すが、そのような冗談ももはや笑えるものではないということが、学生にもわかるだろう。Henchard の今後の転落を決定づける悲劇的な時間であることを知っているからである。プロットの展開をメディアプレーヤーのスピードを速めて知ろうとする今時の学生は、前半の部分の引き延ばしの描写を読み飛ばしたくなるかもしれないが、少し耐えてじっくりと臨場感を味わい、この立場の変換を楽しんでもらいたい。また、その引き延ばしの時間があったからこその、衝撃の大きさなのだということを感じてもらいたいのである。

私は以前の『ハーディ協会ニュース』でも *The Mayor of Casterbridge* を取り上げ、第 1 章と第 19 章を読んだ時の学生の反応を紹介した。この 2 つの章は、とにかくセンセーショナルなプロット展開が衝撃的で面白く、学生にとってもわかりやすく楽しめる場面である。しかし、今回見てきたように、じっくりと想像力を使いながら読むことで、小説はプロットを味わう楽しみだけでなく、臨場感とスリルを与えてくれるのである。対面授業が本格的に再開し、キャンパスに戻ってくる学生たちと想像力のトレーニングを重ね、小説を読む楽しさを伝えていきたい。

25th International Thomas Hardy Festival and Conference 参加報告（１）

金谷 益道

本稿では、2022 年 7 月 25 日〜31 日に、The Thomas Hardy Society (以下 THS) がドーチェスターで開催した 25th International Thomas Hardy Festival and Conference の様子をお伝えする。イギリスは、いわゆる「コロナとの共生」(“living with Covid”) 路線を他の国に先駆けて取る決断をした。そのため、イギリスを拠点にする学会の多くは、対面形式での大会開催をかなり早い時期に復活させた。THS もその一つで、おかげで一年間のイギリスでの在外研究中に大会に参加することができた。2020 年 3 月中頃、一ヶ月後に口頭発表をしに日本から行くはずであったアメリカの学会から、パンデミックのため大会をキャンセルする旨の通知を受け取ったときは、海外の大会に参加できる機会は人生でもう訪れないかも知れないと思いひどく落胆させられたが、THS のサイトに記された対面形式での大会開催や発表募集の知らせは、再び気を引き立たせてくれた。個人的にも、THS には感謝の気持ちで一杯である。

大会は、Keynote Speakers の講演、口頭発表、ミュージアム訪問、徒歩・列車・バスなどでのツアー、演奏会、詩の朗読、ワークショップ、バーンダンス (barn dance) など、パンデミック以前と変わらず盛りだくさんなプログラムが用意されていた。Keynote Speakers の講演では、ハーディ作品における仮定法や条件文の使用に注目した Prof Tim Armstrong の “Hardy’s Subjunctive Mood” と、ヴィクトリア時代後期における規範文法や言語純粋主義に関する議論に対するハーディの反応に着眼した Dr Gregory Tate の “Thomas Hardy’s Pure English” を聞くことができ、講演後両先生と話をすることもできた。六名の Keynote Speakers の中では比較的若い二人が、偶然であるだろうがハーディの文体を講演のテーマに選んだことには、大いに興味をかき立てられた。

口頭発表の方は、26 日から 29 日まで、午前 11 時から 90 分間、大会メイン会場の the United Church 内の二つの場所で同時に行われた。パネルは、“Hardy and Animals”、 “Hardy and the Stage”、“Placing Hardy’s Women” 、 “Points of Conflict, Hardy & Belief Systems”、 “Hardy in Contemporary Contexts”、 “Traces and Uses of the Past in Hardy”、 “Hardy, Medicine and Medical Discourse”、そして私が参加した “Hardy’s Realisms” の合計八つが編成された。参考までに、当日までのプロセスを記すと、一般的な海外の学会と同じで、300 語程度の概要を送り、審査を通過した者からパネル（基本三名）が作られるというものだった。発表中の流れも一般的な海外の学会発表と同様、一人 20 分程の持ち時間で三名が発表をした後、30 分程の質疑応答や発表者同士でのディスカッションなどが行われるというものだった。私のパネルはハーディとリアリズムの関係に焦点を当てたもので、妙技と言えるパネルの命名 (“Hardy’s Realisms”) が物語るように、彼のリアリズム観に対する三者三様の解釈が提示された。自分の発表（タイトルは “Hardy and Photographic Realism”）に対してもらった質問・コメントは、どれも研究のスコープを拡げてくれる、大変ありがたいものだった。他のパネルも時間が許す限り参加し、アフェクト理論やエコクリティシズムを軸にしたものなど様々な発表に触れ、最近のハーディ研究の動向を垣間見ることができた。

講演・発表以外のことについても記したい。実は、大会の開催時期がイギリスでは久方ぶりとなる大規模な鉄道ストライキと重なる恐れがあったため、旅程を立てるのに難儀した。結局ストライキは移動予定日の翌日に行われることになったので、会場最寄りのドーチェスター・サウス駅に無事大会初日に到着することができた。駅のホームに降りてすぐ、一瞬絶句させられることが起きた。日本語で声を掛けられたのだ。（それまで 11 ヶ月間、在外研究先のケンブリッジやその他の地域で、イギリス名物の Literary Festival を始めとして多くの英文学関連のイベントに参加していたが、日本の方に会う機会に恵まれなかったこともあり、この地で日本語を耳にするとは思ってもみなかった。）その声の主が杉村醇子先生だと分かったとき、人目も憚らず驚きの声を上げてしまった。存じ上げなかったのだが、杉村先生も在外研究でイギリス (King's College London) に滞在中で、思わぬ場所での再会を喜び合った。先生とは駅付近で一度別れた後、当日再び会場でお会いした。先生には講演直後の Armstrong 氏と歓談されていた所を仲間に加えて頂き、その後二人で、大会や研究以外にも、コロナ禍での在外研究の大変さなどを話題にし、時の経つのを忘れて話し合った。

大会二日目には、日本から来られた亀澤美由紀先生にもお会いすることができた。コロナによる渡航規制だけでなく、ウクライナ戦争の影響で日本からヨーロッパへの移動がまだ困難な時期だったこともあり、日本から参加者が来られるとは露ほども考えていなかったため、またもや驚きの声を上げてしまった。杉村先生、亀澤先生とは、ドーチェスター・サウス駅から列車で 10 分程の所にあるウェイマス駅周辺を散策するツアーにもご一緒した。他の客がいる中でも構わず始まる列車やパブの中での Poetry Reading には少し面食らったが、大会のオーガナイザーとして八面六臂の働きをしてくれた Dr Tracy Hayes のガイドのもと、陽光を浴びながら、ハーディと縁のある海辺の街を堪能することができた。ご用事で杉村先生は残念ながら大会三日目の日にドーセットを発たれたが、亀澤先生とは最後までご一緒でき、Farewell Dinner の後に行われた、大会を締め括るバーンダンスも共に踊らせて頂いた。

大会中、上記の方々以外にも多くの学会のメンバーに出会うことができた。THS の会長である Revd Canon Richard Franklin には、「パンデミックで international friends が参加できない状態が続いていたので大歓迎しますよ」、とありがたいことばを掛けて頂いた。私のパネルの司会をしてくれたのは、光栄なことに、*Hardy, Conrad and the Senses* の著者である Dr Hugh Epstein であった。（現地からオンライン参加させて頂いた 19 世紀イギリス文学合同研究会でのシンポジウム発表の一番のヒントになったのは、この本であった。）とても親切な方で、私が暮らしていたカレッジに以前友人に招かれて訪問されていたこともあり、研究以外の話題でも話が弾んだ。同じパネルになったアメリカ人と中国人の発表者とは、終了後も、引用箇所が重なりながら解釈が各自微妙に異なっていたことなどを話題にして歓談したが、話が尽きることがなかったので、昼食後すぐの徒歩でのツアーに急遽加えてもらい、ハーディの心臓が眠る St Michael's Church や彼の cottage まで散策しながら話を続けた。

期間中は朝から晩まで行事が目白押しで、行事間のインターバルも短い。周囲の人の助けにばかり頼っていてはだめで、自主的な計画・行動が求められる場であることも付しておきたい。大会は盛況のうちに終了したが、残念ながらコロナによる渡航規制が理由で発表ができなくなった人や、大会中にコロナの陽性になった人もおり、途中、この時期での大会開催の難しさを思い知らされもした。運営サイドは、大変な苦労を強いられた大会だったと思う。最後に、改めてこのような時期にも関わらず大会を開いてくれたオーガナイザーたちに深い感謝の意を述べたい。

25th International Thomas Hardy Festival and Conference 参加報告（２）

亀澤 美由紀

2022 年夏、ドーチェスターにて開催された 25th International Thomas Hardy Festival and Conference に参加した。いまだ感染症対策による規制が厳しいなか、私にとっては意を決しての訪英だった。午前は基調講演とパネル発表、午後は様々なツアーが組まれ、非常に充実したスケジュールだった。その一週間をふりかえってみよう。

今大会は「コロナ共生」を探る試行錯誤の連続だった。基調講演を予定していた Prof Michael Irwin が long Covid のために講演をキャンセル、つづく Prof Richard Nemesvari の講演も録画映像という異例のスタイル。コロナ陽性あるいは渡航制限のために発表を断念せざるを得なかったパネラーも複数名。一方の参加者もキャンセルが相次ぎ、最後まで参加者名簿を確定できず、「名簿を作らない」という決断をしたそうだ。さらには会期終盤、会場システム係の「陽性」が判明して交代を余儀なくされるなど、実に、数知れない困難に挑みながらの大会開催であった。それでも、大会は進み、大会は盛り上がった。この大会を成功させた関係者の方々には、本当に感謝と尊敬の念でいっぱいである。この方々に御礼申し上げたい。

さて、基調講演については THS の HP にプログラムが掲載されているので、ここではそこからは見えてこない事柄――パネル発表――に焦点を絞ろう。各パネルは三つの研究発表から構成される。それら三つはそれぞれ大きなテーマのもとにつながってはいるものの、必ずしも密接な関係があるというほどではない。たとえば 28 日のパネル “Hardy and the Stage” では Jeremy Newton が劇作家 Henry Arthur Jones とハーディ作品の共通点について、Renate K. Miller が *Jude* と Independent Theatre について、Elena Rimondo がオペラのハーディ作品に対する影響について発表を行った。いずれの発表も興味深いものだったが、これら三人の発表の潜在的価値が引き出されたのは、そのあとのディスカッションの時間である。この日に限らず前日の “Hardy and Belief Systems” でもそうだったのだが、三人目の発表が終わるやいなや、聴衆からのコメントが次々と飛び出す。時には司会者をはさまずに直接フロア同士のやりとりが続く。そうこうするうちに、それまでさほど関連していないかに見えていた三つの発表が、緊密な連携関係へと高まっていくのである。言葉と思考が、会場の空気のなかに見えない輪をつくって人々を高揚感へ誘っていく。あっという間の 30 分である。“Hardy and the Stage” のパネルに関して言えば、最初、外への広がりが見えなくて何となく窮屈な感じのしていたそれぞれの研究が、ディスカッションを経たあと、一回りも二回りも大きくなって見えたから実に不思議である。人々が一つ所に集まって議論をすることの醍醐味が、ここにあった。のちに運営委員のひとりが語ってくれた――「多数の応募のなかからどれを選び、さらにどれとどれを同じセミナーに組むかが思案のしどころなんです」、と。おお

いに納得できた。そしてまた、バラバラにしか見えない発表をつないで大きな輪をつくること――これがフロアの役目であるとあらためて学んだ。

午前中の緊張した空気を抜け出て、午後のエクスカーションに参加するのは気持ちのよい気分転換だった。なかでも Wessex Museum Tours（Dorset Museum, Poole Museum, Salisbury Museum, Wiltshire Museum）は晴天にも恵まれ、素晴らしかった。プールはニューファンドランド島との交易で栄えた町である。St. James Church【写真 1】は大きなギャラリーや聖歌隊席が人目を引き、その繁栄を今に伝える。ツアーではこの教会に座って、この町を舞台にして書かれた短編 “To Please His Wife” を朗読するガイド Alban の声に、皆で耳を傾けた。一方、ソールズベリーにはハーディの妹メアリーとケイトが学んだ寄宿学校があり、今は Salisbury Museum【写真 2】となっている。スーがメルチェスターで学んだカレッジのモデルはここだという。「外へ飛び降りるには少々窓が小さいが、門限に遅れた生徒が屋根を伝って窓から忍び込むことはあったらしい」とのこと【写真 3】。ちょうど Hardy’s Wessex Exhibition の開催中で、ケイトが着ていた深紅の絹のドレスが展示されていた。ポランスキーが描いた、最終局面でのテスの衣装に似ていなくもない。

【写真 1】St. James Church, Poole

【写真 2】 Salisbury Museum

【写真 3】Sue が学んだカレッジはここか

【写真 4】 Bubb Down

そのほか Budmouth Walk では Dr Tracy Hayes の案内でウェイマス一帯を歩いた。Tracy のエネルギッシュなパーソナリティに参加者全員が心を温められ、友好の輪が広がった。金谷先生、杉村先生とご一緒したアイスクリームが美味しかったこと！　望むらくは、もっとゆっくり味わいたかったけれど。さらに A *Woodlanders* Walk では Bubb Down から Melburys, Blackmore Vale を一望した【写真 4】。

イヴェントは夜まで続く。27 日の夜 8 時、スト決行中の British Rail を諦め、バスに揺られること 20 分あまり。着いたのは冷たい風吹きすさぶ Weymouth Beach である（つい一週間前までイギリスは歴史的な熱波に覆われていたはずなのだが…）。そこにいたのは Poetry Reading のために集まったハーディ学会の古参、総勢 20 名余り。そこに往年の名ガイド Furse Swann も車椅子で参加し、各自が懐中電灯と詩集を手に輪となって、自分の好きな詩を朗読する。最後にこのイヴェントの創始者 James Gibson をたたえて彼の一番好きだった “Great Things” を全員で朗読して一時間の会が終わった。

さて、翌 28 日も Poetry Reading が、Maunbury Rings で開かれるというので行ってみた。ところが 8 時になってもだれも現れない。実は、場所変更の知らせがあったのをすっかり忘れていたのだが、私のほかにもう一人、そのことを知らずにやってきた人物がいた。話をしようとそばまで行ってはじめて、その人が学会に来る人々とは少々違うタイプであることに気づいた。無口で、上着の下からパジャマらしきものが覗き、Rings の近くに住むと言う。その彼がモソモソとポケットから取り出したのは、ビニル袋に大事そうに入れられて、折り皺がつき端の黒ずんだ、私もそのむかし学会でもらったことのあるドーチェスターの地図だった。相手が帰ろうとする素振りをみせず、こちらもこれといってすることはなく、無口なイギリス人を相手になぜか私が一方的におしゃべりをする羽目になった。一心に、こちらの言葉をまるで物語を聞くように、耳を傾けてくる。話したり沈黙したりするうち、やがて、それまで西日の届いていた Rings の窪地は真っ暗になり、私たち二人の立つ頂上部だけがわずかに明るかった。

彼――David という名だった――とのあの時間は何だったのだろう。学会とは無縁の世界にいながら、ハーディのことばが読まれるのを毎回毎回、ずっと心待ちにしている人がいたという事実に、ずっしりとした重みを感じた。ハーディという作家の深さ、本当の姿をそこに見たような気がする。

個人的思いを長々と書きすぎたかもしれない。だがこれも、私がこの一週間で心に受けた印象のひとつである。最後にあらためて、この大会を実現させ、日本からやってきた私を温かく迎えてくれた会長 Richard Franklin 夫妻や Tracy、美しいピアノ演奏を聴かせてくれた Philip Lange、そのほか出会ったすべての方々に心より御礼申し上げる。

第 65 回大会印象記

山内 政樹

日本ハーディ協会第 65 回大会は、2022 年 10 月 29 日(土)、名古屋大学東山キャンパスで開催された。3 年ぶりに対面での開催となった。庶務委員長の今村紅子氏により開会の辞が述べられ、麻畠徳子氏による司会のもと 2 名の研究発表が行われた。

最初に、丹野海晴氏が「『日蔭者ジュード』(1895)と家族愛の誕生―新たな家族意識の形成をめぐって」と題し、ウェセックスの人々が生活の基盤としていた農村共同体の伝統的価値体系に従う家族意識と、ジュードとスーの家族意識との間にある大きな差異について例証し、『ジュード』に描かれた家族意識の揺らぎについて論じられた。ジュードとスーの関係性について、「近代家族モデル」の特徴との対比から分析し、伝統的価値観から結婚する人々は共同体の永続性を目的に結婚する一方、ジュードとスーは夫婦間の情愛と親子愛を大切にし、家族として団結した近代的核家族の形成を試みたと述べられた。そして、彼らの試みは従来の家族意識を相対化する視点を提供すると共に、結婚制度そのものを痛烈に批判する、とまとめられた。

次に、永盛明美氏が「ハーディ作品におけるジプシーの表象―“The Sacrilege: A Ballad-Tragedy”を中心に」と題して、“The Sacrilege”に描かれる男女の造形や文化的背景、取り巻く環境を読み解くことで、ハーディのジプシーに向けられたまなざしや当作品の意義について論じられた。ジプシー女性の性に奔放で積極的、外見上の美を武器とする魅惑的で危険な存在というステレオタイプ化した特徴や、彼らの服装文化、生活空間であり性的空間でもある幌馬車の分析など詳細に発表された。また、「復讐劇」という枠組みから“The Sacrilege”を捉えてジプシーを前景化することで、ハーディは他者としてのジプシーのイメージを越えて、個人として、家族の絆を抱える一人の人間としての彼らの姿や感情を描き、ジプシーの再評価を試みたのであると言及された。

続いて、西村美保氏の司会のもと、辻建一氏が「『青い瞳』から『ダーバヴィル家のテス』へ―テスの死の意味」と題し、パワーポイントを効果的に使用されながら発表された。『青い瞳』と『テス』の共通点・類似点として、家柄、歴史ロマン、遺伝や祖先、家系にまつわる伝説や肖像画などを挙げられ、エルフリードとテスの “pure”についても論じられた。初期の作品である『青い瞳』は、ハーディが作家として売れるため、物語展開を重視して執筆された一方で、『テス』においてハーディは大家として書きたいものを書いたと述べ、ハーディはテスという character に poetry を体現しようとし、物語の time-span や perspective などにおいても『青い瞳』より、ダイナミックに描かれ、スケールが拡大していると結論付けられた。

研究発表後、総会にて、次回大会と第 1 回 19 世紀イギリス文学合同研究会についての報告があった。

続いて、清宮倫子氏が司会兼講師となり、藤田祐氏と Neil Addison 氏が講師となってシンポジウム「ハーディと進化論―実りある研究に向けて」が行われた。進化論と言えば Darwin の名が挙がるが、当時人気があったのは Spencer であり、自然神学の Paley や獲得形質の遺伝の Lamarck や Chambers など実に多くの進化論があったという導入の後、藤田氏が「ハーバート・スペンサーの進化社会理論と政治思想」と題する詳細な発表を行われた。藤田氏は、「初期スペンサー思想」、「進化理論」、「個人主義」という 3 つの段階に分けて Spencer を分析された。「初期スペンサー思想」は進化理神論とされ、それは理神論に支えられた普遍的規範と社会進化論によって支えられていたが、「進化理論」では、神は不在で、2 つの意味での社会進化論を展開し、それを支えていたのが「第一原理」であると分析された。「個人主義」では、『人間対国家』(1884)の様々な論考から個人主義を正当化する古典的リベラリズムの時期であると結論付けられた。次に Addison 氏が「Hardy and Darwin Among the Poets」と題して発表された。まず、 “harmony of view with Darwin” をキーワードに、Darwin、Spencer や Chambers の進化論に言及され、ロマン派詩人の Keats や Shelly の業績を踏まえ、いかにハーディがそれらの影響を受けて優れた詩を書いたかについて情熱的に述べられていた。ハーディと Darwin (進化論)の出会いがハーディを一流の詩人にしたと締めくくられ

た。最後に清宮氏が「ダーウィン『人間の由来』と小説家ハーディの終焉」と題して発表された。『人間の由来』から、reproduction、sexuality、social instincts や sympathy などのキーワードを解説され、それらを基に *The Well-Beloved* の分析を中心にシンポジウムを締めくくられた。

最後に、亀澤美由紀氏の司会のもと、大石和欣氏の特別講演「世紀末のコテッジと農村共同体―トマス・ハーディ小説における建築表象」が行われた。大石氏は、『テス』において、テスがフリントコム・アッシュに向かう道中で、コテッジの軒先で雨宿りをする場面の意義について考察された。コテッジの中では一家だんらんの世界が広がっているが、それとは対照的に帰るべき家を失い、家庭的にも社会的にも居場所を失った homeless のテスの姿が鮮明に描かれている。この対照的な状況は聖書にもあるルツのイメージと重なり、また「『世紀』の遺骸」を前に歌う大ツグミのイメージとも重なると解説された。幸福や希望の象徴であるコテッジから放逐され、移動と歩行を繰り返すその軌跡は、世紀末イングランドの「ひび割れ」、「裂け目」を物語っている。その世紀末の「ひび割れ」に落ち込んだ人々の表象としてのテスの姿が雨宿りの場面に描かれ、 “home-less” = “hope-less” な存在故の不安と絶望が描きこまれていると結論付けられた。

総てのプログラムが終了し、金子幸男会長が閉会の辞を述べられた。いまだコロナ禍が続く中で、対面での大会運営に尽力されたすべての方々に心よりお礼申し上げます。

事務局よりのお知らせ

会費納入について

今年度の会費納入をお願いいたします。会計年度は 4 月から翌年 3 月まで、年会費は 4,000 円（学生・大学院生は年 1,000 円）です。当協会の会費は、長年にわたって値上げをしておりません。ほかに維持会費として、任意の一口 1,000 円のご寄付をいただいております。とくに役員の方にはご協力いただけますと幸いです。顧問の先生方は一般会費のお支払いは不要です。なお、会費を 3 年間滞納なさいますと退会扱いになりますのでご注意ください。

日本ハーディ協会の振替口座番号は 00120 - 5 - 95275 です。会費は、郵便局からお振込みください。会費納入用の振替用紙は、9 月の『ハーディ研究』送付時にお送りいたします。

登録内容の変更について

勤務先の変更、転居、送付物の送付先住所やメールアドレスの変更など、登録内容に変更がありましたら、お手数ですが、事務局までお知らせいただきますようお願いいたします。

次回大会について（研究発表募集）

次期大会は、今年の 11 月 4 日（土）に関東学院大学 横浜関内キャンパス（〒231-0031 横浜市中区万代町 1-1-1）にて開催されます。変則的ですが、午前に日本ハーディ協会第 66 回大会を開催し、午後には第 1 回 19 世紀イギリス文学合同研究会が開催されます。午前のハーディ大会における研

究発表（1 名予定）にご応募の方は 4 月 30 日までに、①発表要旨：日本語で発表される場合は 600 字程度、英語で発表される場合は 150 語程度、②カバーレター：発表タイトル、お名前、所属大学・機関、身分、連絡先（メール・アドレスを含む）を記した用紙、③略歴表、の三点を、郵便または電子メールにて協会事務局までお送りください。発表時間は 25 分で、10 分程度の質問時間を設けます。簡単な審査のうえ、ご依頼いたします。多数のご応募をいただけますよう、ご期待申し上げます。

午前のハーディ大会では、研究発表と特別講演を予定しております。特別講演の講師は、川端康雄先生（日本女子大学教授・現日本ワイルド協会会長）にお願いいたしました。川端先生は、ジョージ・オーウェル、ウィリアム・モリスをはじめとして、ラスキン、ウォーターハウス、アーツ・アンド・クラフツ運動、唯美主義、レイモンド・ウィリアムズなどの著名な研究者です。ハーディとモリス、またその他の作家、画家との関係について刺激的なお話をしていただけるものと思われます。

ハーディ大会では、シンポジウムを開催いたしませんが、大会と同日、午後に開催される第 1 回 19 世紀イギリス文学合同研究会では、シンポジウムが予定されています。ハーディ協会からは西村美保先生（名古屋学院大学教授）が司会兼パネラーとして参加されます。合同研究会シンポジウムのテーマは「19 世紀イギリス文学における同性間の交流とコミュニケーション」です。その他のパネラーは矢次綾先生（松山大学教授・日本ギャスケル協会）、玉井史絵先生（同志社大学教授・ディケンズ・フェロウシップ日本支部）、金田仁秀先生（群馬大学准教授・日本ワイルド協会副会長）です。

内容等の詳細は次号の協会ニュースにてお知らせいたします。

《内外ニュース》

会員の訃報：

2022 年 3 月 28 日、押本年眞先生（同志社大学名誉教授）がご逝去されました。押本先生はシンポジウムに参加されたり、トマス・ハーディ全集 14-3 巻『覇王たちⅢ』を訳されるなど、長くハーディ協会に貢献されてこられました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

会員による著訳書：

南協子訳『恋の霊―ある気質の描写』（ルリユール叢書、2023 年 2 月）

渡千鶴子（責任編著）、橋本史帆（編著）、麻畠徳子、木梨由利、高橋路子著『言葉を紡ぐ――英文学の 10 の扉』（音羽書房鶴見書店、2023 年 3 月）

《編集後記》

今号からしばらく協会ニュースの編集者を務めさせて頂くことになりました。前号に引き続き、今号でも、2022 年 2 月に逝去された深澤俊先生への追悼文を掲載させて頂くことになり、藤田繁先生にご寄稿を依頼しました。藤田先生には、心より御礼申し上げます。深澤先生と半世紀以上にわたりお付き合いをされていた藤田先生の貴重な思い出に、皆さまも日本ハーディ協会の歴史の重みを感じられたことと思います。

デジタル出版の強みを活かし、紙媒体では費用がかさむカラー写真を今号では掲載しました。（PDF ファイルは、容量があまり大きくならないよう圧縮しています。）五枚ともすべて 2022 年 7 月の国際ハーディ大会の期間中に撮影されたものです。巻頭の私の写真は、藤田先生も文中で触れておられる、Weymouth――Wessex の世界では Budmouth――の風景です。それ以外の写真は、亀澤美由紀先生にご提供頂きました。私の大会参加報告は、勤務先の役職の関係で海外の大会への参加がしばらく難しくなることもあり、編集者を仰せつかる前から投稿を考えていたものです。今回、亀澤先生にも執筆して頂いて、ミニ特集を組むことにしました。この特集が、大会や他の国際学会大会への参加や発表を考えられている方々の参考になれば幸いです。

研究や教育の場では、「コロナ禍からの再興」といった雰囲気が漂い始めています。次号をお届けする頃には、今よりもっと状況が良くなっていることを願っています。

ご執筆くださいました方々に、厚くお礼申し上げます。次号は 2023 年 9 月発行予定で、投稿の締め切りは 2023 年 7 月 10 日です。論文、随筆は 2,000 字程度、短信、個人消息は 500 字程度です。どうぞ皆さま、奮ってご投稿ください。（編集者の責任で内容を編集する場合があります。また、編集者と会長の判断で掲載できない場合があります。あらかじめご了承ください。写真を付ける場合は、被写体となった人物や撮影者等の掲載許可を得てからご投稿ください。）ハーディに関する著書、翻訳等につきましては編集者までご連絡ください。

日本ハーディ協会ニュース　第 93 号
HP 公開日　2023 年 4 月 1 日
編集者　金谷 益道